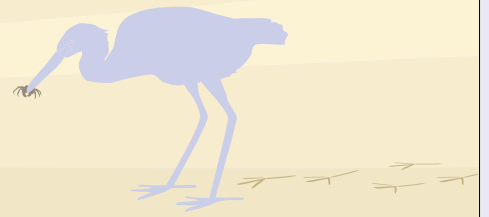


# なぎさ NEWS



## 冬の渡り鳥

今年も水族園の前の海に多くの渡り鳥がやってきました。この渡り鳥の多くはスズガモで、夏にシベリアなどの北の地方で繁殖し、冬は日本などの内湾の干潟近くで越冬します。とくに葛西周辺の海には、数千～数万羽の大群が見られます。スズガモは、潜水して二枚貝をとって丸のみにして食べるため、干潟近くの海は絶好のすみかとなります。そして、丸のみにした二枚貝は、砂のうという強力な器官で貝殻を割って中身だけを消化します。「西なぎさ」では、スズガモが食べた跡と思われる細かく砕かれた貝殻が多く見られます。今年10月、「西なぎさ」を含む葛西海浜公園はラムサール条約登録湿地になりましたが、スズガモの大群が越冬していることが大きな理由の一つとされています。(教育普及係 池田 正人)



「西なぎさ」で見られたスズガモのオス

## 干潟をテーマに「海の学び舎」を実施

水族園では東京大学海洋アライアンスの協力を得て、高校生・大学生向けの教育プログラム「海の学び舎」を実施しています。将来の進路を決める重要な時期を過ごしている参加者に、第一線で活躍されている研究者から、研究に関することと研究者を志した理由などをお話していただいています。今年度の第1回目を、東京湾の干潟環境と生き物について研究をされている東邦大学名誉教授の風呂田利夫博士をお招きして9月24日に行いました。今回の主題は、「干潟の周辺では海水の塩分濃度の差により、さまざまな生き物がすみわけていること」についてです。午前中は「西なぎさ」と葛西臨海公園鳥類園の協力により「下の池」でのフィールドワークを行い、干潟の生き物のすみわけ状況を観察しました。午後は水族園に移動し、午前中に採水した海水と、比較のため、水族園の水槽の海水と身近な食品なども一緒に塩分濃度を測定しました。結果は、西なぎさ2.2%、下の池1.4%、水槽の海水3.5%、しょうゆ16.0%、スポーツドリンク0.1%となり、参加者は結果に興味津々の様子でした。その後、かつての東京湾沿岸は干潟の占める面積が大きく、多種多様な生き物が豊富に生息していて、それを人々が利用してきたこと、そして、それらを研究してきた風呂田先生の経歴をお話いただきました。プログラム中は参加者から先生に活発に質問があり、研究することのおもしろさを体験を通じて知ってもらえたのではないかと思います。(教育普及係 西村 大樹 / 佐藤 薫)



風呂田先生を先頭に「西なぎさ」を探索



採集された生き物を確認する参加者

## なぎさ 生き物ミニ情報

水族園は「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、10月に行った地曳網調査と生き物調査の結果をお伝えします。干潟でも季節の変化を感じる時期です。

**10月地曳網調査：**気温 26.0℃、水温 25.0℃。夏にくらべて採集される生き物の数は減り、ハゼ類の姿はほとんど見られなくなりました。一方でヒイラギが数多く採集されたほか、サッパは8月の調査時より一回り大きく成長したものが採れました。

**10月生き物調査：**気温 23.4℃、水温 26.5℃。「西なぎさ」に入ると、無数の砂団子とコマツキガニたちが出迎えてくれました。砂を掘ってみると5mmほどの今年生まれの個体も見つかりました。潮だまりでは、2～5cmほどのコトヒキやマゴチの幼魚を観察することができました。